

平成22年9月16日

## 第1回民放連・ATP放送倫理セミナー 「バラエティー番組と放送倫理」の概要

1. 日 時 平成22年7月29日（木） 午後2時～4時30分
2. 会 場 全国都市会館2階大ホール（東京都千代田区平河町2-4-2）
3. 参加者 約150人（民放関係者約120人、ATP関係者30人）
4. 概 要

### (1) 講演「バラエティー番組における倫理とは」（14:00-14:50）

三宅 恵介 氏（フジテレビ・役員待遇編成制作局エグゼクティブディレクター）

BPO放送倫理検証委員会の「最近のテレビ・バラエティー番組に関する意見」への感想として、「全くそのとおり。申し訳ございません」という気持ちだと語り、「視聴者が嫌だと感じるものは、いかんともしがたい。制作者は真摯に受け止めなければならない」と述べた。続いて、「バラエティー番組が嫌われないための方法論はある」として、意見書に挙げられた「バラエティーが嫌われる5つの瞬間」で指摘された「下ネタ」や「イジメ」などの事例について、具体的な表現手法を例示しながら改善策を提示。「バラエティー番組に正解はないが、ウソはダメ」「番組には『知性』『感性』『個性』『意外性』『品性』の5つが必要」と総括。そのうえで、「意見書の『バラエティー制作者には“何をやってもいいし、何でもあり”の心意気を失わないでいただきたい』との記述は優しすぎる。制作現場に制約はいくらでもある。だからこそ創造力を発揮させてほしい」と奮起を促した。



(2) パネルディスカッション「送り手のバラエティー、受け手のバラエティー」(15:00-16:30)

<パネリスト> 山本隆司氏(テレビ朝日・編成制作局制作1部統括担当部長)

荻原伸之氏(株式会社ジッピー・プロダクション取締役)

近藤晶氏(東京新聞放送芸能部記者)

<司会> 水島久光氏(BPO放送倫理検証委員会委員/東海大学教授)

水島氏は、「テレビの制作現場には、外部からの指摘を受けて、振り返ったり立ち止まって考える余裕がないのでは?」「制作現場が空洞化して、作り手も迷っているのではないか?」と問題提起。これに対し、「昔と比べて現場のADクラスの業務量は格段に増えている。厳しい条件下で、番組への愛情や放送人としての矜持を作り手それぞれがどれだけ持てるかにかかっている」(山本氏)、「視聴者の目が肥えてきて、簡単にチャンネルを変えられてしまうかもしれないという恐怖心から、刺激的な手法に走ってしまうのではないか」(荻原氏)などの発言があった。



このため、良好な制作環境を整えていくために、「分業化の進んだ制作現場で、責任感などの意識を共有でき、立ち止まって考えることのできる現場の構築が必要」(山本氏)、「先輩から後輩へのノウハウの伝承と緊密なコミュニケーション」(荻原氏)などが指摘された。また「東京新聞」で放送・芸能欄を担当する近藤晶記者が視聴者の立場から、「作り手が自信を失っているように思える。自分が本当に面白いと思うことを、自信を持って送り出せるような活気ある現場づくりを」と提言した。

以上